

浦賀文化

第82号

令和7年7月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

吉井のこと

地名の由来と地域の特徴

吉井のことという、現在は

浦賀ではないので本紙「浦賀文化」にそぐわないのではないかと
言われてしまいそうだが、後述する
ように元は西浦賀村の一部であった。明治から昭和にかけて執筆された地誌である「浦賀志録」によると康平六年（一〇六三年）に三浦一族の祖、三浦為通が吉井に怒田城を、衣笠に衣笠城を築いたことから一帯の繁栄が始まったとして怒田城が築かれた吉井について「浦賀全地ノ管領元」で浦賀の事跡を調べるには吉井で調査の方針を定める必要があるとしている。怒田城については本紙の第四十三号で取り上げられたことがあったが、ここでは吉井という地域についてごく簡単にだが取り上げてみたい。

○地名の由来

「吉井」というのは、三浦七井（しちせい）の一つで、吉井・筑井（津久井）・飛井・長井・大井戸・亀井・石井の七つのうちの一つである。「浦賀志録」には、「古井の「古」の字を「吉」に代えて「吉井」といったと相模風土記に記載されているとあり、この井戸があったことがこの地名の由来であるという。

ただ『横須賀雑考』をみると、「吉」の字は「葦」の宛字とも見られ、「井」の字についても「邑落あるいは村」の意味にとることもある。そのように解釈するならば「内川の入江がこの部落奥まで入り込んで水をたたえ、その岸辺に葦が茂っているというような風景からの地名だともいえないことはないと思われる。」とあってまた別の説を展開している。「吉井」の地名について諸説あることを示してはいる。

* * *

○ペリー来航前までの吉井

嘉永四年（一八五一年）七月、吉井に住んでいる七郎兵衛という者が芝生の畠田というところ
で金を拾った。この金は半年経っても落ともし主が見つからず、結局一部を除いて金二両一分三朱という額が七郎兵衛のものになったという。七郎兵衛にとつ

ては思わぬ臨時収入となったのでさぞ嬉しかったことだろう。

ところで七郎兵衛の所在について「西浦賀吉井」とある。吉井は今でこそ「神奈川県横須賀市吉井」で浦賀ではないが、その当時は「西浦賀吉井」とあり西浦賀村の一部であった。明治、大正、昭和へと時代が移り変わるにつれ市町村名など変遷があるのはもちろん珍しいことではない。しかし吉井が少し違うのは、西浦賀村から独立したり、戻ったりという変遷が江戸の頃からあったということである。

これは分郷といって、一つの村を分けて別々の支配下に置くこと指す。吉井の分郷は、文化八年（一八一一年）に会津藩が三浦半島に着任したことに起因する。

異国船から江戸を守るための沿岸警備のためにやってきた会津藩には、会津藩本領の一部と引き換えに（浦賀奉行所管轄の村と一部の寺領を除く）三浦半島の大部分が領地として与えられた。この時、西浦賀村・東浦賀村・三崎町の一部で分郷ができていた。西浦賀村について言えば、会津藩が平根山に台場を築いた時に台場周辺に自分たちの領地がないことは不便であるとして、西浦賀村の一部である吉井・久比里・川間（現在の長瀬・西浦賀五・六丁目辺り）が浦賀奉行所の管轄から外れて会

津藩の領地となった。この時これらの地域は西浦賀分郷として独立した一つの村となったのである。その後会津藩の任務が解かれると、文政九年（一八二六年）に分郷だった地域はまた西浦賀村に戻った。嘉永五年（一八五二年）六月に三浦半島の警備を担当していた彦根藩が分郷だった地域を領地としたために再度西浦賀分郷になった。この後は明治を迎えるまで西浦賀村に戻ることはなく西浦賀分郷のままだったようで、西浦賀村に戻るのは明治元年（一八六八年）九月、東西の浦賀村が合併し浦賀村となる二年ほど前のことであつた。

ちなみに冒頭の七郎兵衛が金を拾ったのは彦根藩分郷となる前なので、「西浦賀吉井」となっていたわけである。この「吉井」を含めた分郷は異国船来航によって存在のしかたそのものが変化した地域と言える。

（山本 慧）

★参考文献

『新編相模風土記稿』第五巻 雄山閣 一九八〇年

『浦賀志録』上巻 加茂元善著 横須賀市 二〇〇九年

『横須賀雑考』 横須賀文化協会 一九七四年

『横須賀市史』資料編 近世Ⅱ 横須賀市 二〇〇九年

『新訂白井家文書』第二巻・第三巻 浦賀史学研究会編

発行：浦賀行政センター 編集：浦賀コミュニティセンター分館 〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 ☎ 046-842-4121

千代ヶ崎砲台一三〇年のあゆみ

—千代ヶ崎砲台の概要と建設の背景—



千代ヶ崎砲台

西浦賀に所在する国史跡東京湾要塞
跡千代ヶ崎砲台跡をご存じでしょうか。
燈明堂跡に向かう途中の右手の坂を上った突き当りに、明治時代の陸軍によって建設された砲台跡が往時の姿をそのままに残されています。

今年（令和七年）、千代ヶ崎砲台は建設一三〇周年を迎えました。

起工：明治三五年（一八九二年）二月六日
竣工：明治三八年（一九〇五年）二月五日

千代ヶ崎砲台は完成後、昭和二〇年（一九四五年）の終戦までの五〇年間、陸軍の砲台として東京湾の守りにつきましました。戦後は一時期民間に農地として払い下げられましたが、昭和三五年

（一九六〇年）に海上自衛隊の千代ヶ崎送信所が設置され一般の立ち入りが禁じられ、平成二五年（二〇一三年）に通信のデジタル化に伴い施設廃止となりました。

その後、平成二七年（二〇一五年）には保存状態の良い猿島砲台跡と合わせて国の史跡に指定されることになり、横須賀市が文化財の管理団体に指定されて公開のための整備工事を実施し、令和三年（二〇二一年）の秋から土日祝日のみの一般公開を行っています。今回は、建設から現在に至るまでの「千代ヶ崎砲台一三〇年のあゆみ」を三回に分けてお伝えしようと思います。



○東京湾要塞とは

海に囲まれた日本では、古来外国からの侵入を防ぐために海岸線の防衛が行われてきました。明治維新後、新政府は首都東京防衛のために三浦半島と房総半島に西洋式の沿岸砲台を建設す

ることを計画しました。明治一二年（一八八〇年）に建設を開始した観音崎第一砲台（現在の神奈川県立観音崎公園内に所在）を皮切りに、終戦までに三二の砲台が築かれ、これらの砲台群によって守備する要地を所在地の名前を取って「東京湾要塞」と呼びます。

○千代ヶ崎砲台の構造と役割

千代ヶ崎砲台は、東京湾要塞を構成する砲台の一つとして建設されました。標高約六五mの高台に二八糎榴弾砲という大口径の火砲が六門据え付けられ、先に建設された観音崎砲台群の側防と浦賀湾前海域の防禦を任務としていました。また、背面側の久里浜湾から平作川への上陸を阻止するために小口径の火砲も据え付けられていました。

千代ヶ崎砲台が建設された明治時代中頃は、日本が近代国家として大きく動き始め、社会や産業、制度が整備される一方、外交面では朝鮮半島をめぐって日本と清国との緊張が高まりつつあり、戦争がいつ起きるのかという時勢でした。実際、千代ヶ崎砲台の建設中に日清戦争が開戦し（明治二七年七月〜二八年四月）、大砲の据え付け工事が間に合わず、明治二七年（一八九四年）八月に榴弾砲を急遽四門だけ配備したという記録になっています。建設工事は、陸軍の工兵第一方面が担当しました。

（教育委員会生涯学習課 川本真由美）

～千代ヶ崎砲台見学のご案内～

公開日：土日祝日

時間：9:30～16:30(3-9月)

9:30～15:30(10-2月)

※入場は、閉場 30 分前まで



笑話一題

年に数回は国内旅行に行く旅好きの私が必ず行うことをお話しします。その一、その土地のおいしいものを食べる！

当たり前の事と思いますが…。私の場合、参考にするのは農林水産省のホームページ「うちの郷土料理」です。伝承地域、歴史、機会や時季、作り方まで掲載されてとても勉強になります。旅前に必ずチェックします。ちなみに横須賀市のもも掲載されてますので検索してみてください。

そしてもう一つチェックする本があります。「郷土みやげと民芸品」（日本交通公社編）です。古本屋で見つけた昭和四五年発行の本で、掲載されている商品の中には既に取り扱っていないものもありますが、現存する商品もたくさんあり、この令和の現在まであるということは美味しいものに決まっています！ということをよく参考にしていただきます。

まだまだ私の旅の決まり事があるのですが、おいおい、この笑話一題で紹介したいと思います。

（ふゆてん）

